

「そして、光がのぼった」

マタイによる福音書 4章1節～17節

説 教 久保田拓志 伝道師

四十日四十夜の断食の後、イエス様は空腹になりました。空腹とは、ただの空腹ではありません。ご自分の肉体の力、知恵の力をすべて捨て去った状態、からっぽの状態です。イエス様は、悪魔の試みを受けてくださいました。

3つの試みに対するイエス様の応答は、旧約聖書の申命記からとられています。第一の誘惑に対するお答えはこうです。「人は神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」申命記8章2節から3節に記されています。

第2の誘惑では、悪魔はイエス様を、荒野からエルサレム宮殿の屋上の端に連れていきました。ここから飛び降りてみると、悪魔はささやくのです。それに対するお答えをイエス様は、申命記6章16節から引用されています。試練の中、苦し紛れに神様を試し、一か八かの危険な賭けに出て神様を試すということは、信頼とは真逆の疑いと恐れに満たされた世界です。

第3の誘惑は、偶像崇拜の誘惑です。当時の、ギリシャ・ローマの世界にあって、様々な神を拝むこと、また、皇帝を神として崇拜することは、生活に直結した宗教的な行いでした。私たちもまた、神ならぬ様々な現象や事柄を自分の神として拝む誘惑には、常にさらされているのではないのでしょうか。

これら3つの誘惑を見るとき、神の子である罪のないイエス様が、わざわざなぜ、罪を清める洗礼を受けられたのか、荒野で、その精神と肉体を究極まで追い込んで、悪魔と対決してくださったのかがわかってきます。

私たちもまた、悪魔からの誘惑に誘われるようなことがおきるとき、悲しみのあまり、虚無の心や絶望の思いにかられるとき、そんな時こそ、自分の知恵や力、経験に頼るのではなく、ひたすらイエス様に向かって、救いを求める祈りを捧げることが、とても大事であることがわかります。

また、神様の救いを受け止めるということは、私たち一人一人が、自分の罪の問題と向き合うことになることをイエス様はよくご存知でした。救われるという体験と、自分の罪と向き合うという体験、その二つは常にセットで、私たちの身におきてくるのです。

パウロは、コリント人への第二の手紙4章6節で『「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照らして下さったのである。』と、彼自身が悔い改

めた時の体験をのべています。

続く7節では「この宝を土の器の中に持っている」とも語ります。土の器というのは、素焼きの粗末な器で簡単に割れてしまう、ひびが入りやすい器のことです。ひびや欠けがなければ、中にある光は光となって周囲を照らすことはないでしょう。一方、その光は、より鮮明にひびや欠けを浮かび上がらせ、私たちはそれを直視せざるをえない光でもあります。しかし、それでよいのです。イエス様の「悔い改めなさい」という言葉は、「向きをかえる」と、「帰る」を意味しています。向きをかえて、どこに帰るのかと言えば、神様に向かって帰るのです。ただ神様の真実にむかって、自分の存在をゆだねるということです。それは、一回きりの自覚的な堅い決心ではなく、何度も何度も繰り返して、神に向かって立ち返ること、向き直ることを意味しています。私たちは、何度でも失敗をし、罪を犯し、自分の弱さに躓きを覚えます。その度に、何度でも何度でも神様の方に向き直ることを、神様の真実に信頼し、ゆだねることをイエス様は、私たちに命じておられます。

その理由は「天国が近づいたから」です。「天国」とは神様の支配する国のことです。神様の支配が「近づいた」とはどういうことでしょうか。それは、すでに近くにきてしまっているという意味です。ひびだらけ、かけだらけの器のまま、イエス様に向かって何度でも向き直れ、神様のご支配は、常にあなたのすぐ傍らにあるのだから、そうイエス様は、私たちを招いてくださっているのです。

イエス様が、私たちの救いのために体験してくださった荒野での悪魔との対決は、そのまま、まっすぐにイエス様が十字架刑への道を歩む、最初の一步となりました。ヨハネによる福音書が伝えるところによれば、十字架上のイエス様の最後のお言葉は「成し遂げられた」でした。

イエス様が、その全生涯をかけて成し遂げようとしてくださったこと、完成しようとしてくださったこと、それは、私たち罪人の人生の完成です。

「悔い改めよ、天国は近づいた」。私たちが全体重をかけてもよい、と神様が言ってくださるほどに、私たちのすぐ近くにまで来てくださっているのです。これが、私たちの唯一の希望、唯一の慰め、そして光です。

(記 久保田拓志)